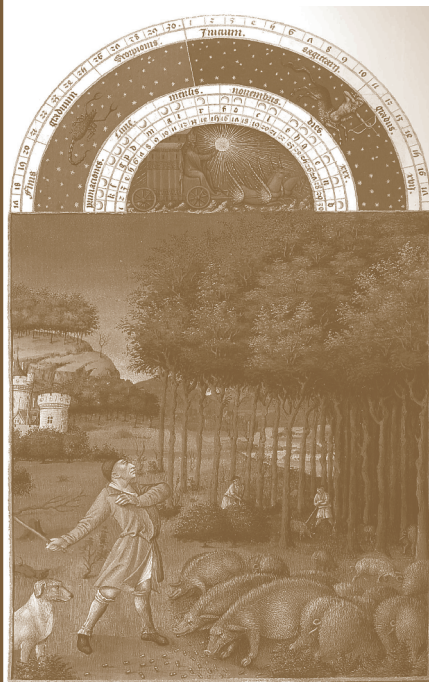


Newsletter 19

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第19号 / 2011年11月30日発行

Contents

- 巻頭言 キャンパス都市日吉
- 特集Ⅰ 社会・地域連携セミナー
- 特集Ⅱ 身体知とメディアを通した多様なリテラシー教育
- 特集Ⅲ カリキュラム研究——半期制と授業評価
- 特集Ⅳ 研究サポート～「研究会助成制度」
- 特集Ⅴ 研究サポート～「研究の現場から」
- 活動報告 ビア・メンター／選書、今年の収穫／日吉行事企画委員会（HAPP）秋の実施予定／10周年記念事業を公衆します
私の〇〇自慢



キャンパス都市日吉

教養研究センター副所長
吉田恭子（文学部）
Kyoko Yoshida

日吉に着任して11年になります。新任教員オリエンテーションでキャンパスをまわったときちょうど来往舎が建設中で、次年度から研究棟となる巨大な建物を見てそのあまりの立派さに、自分は知らないうちに慶應に魂を売ったのかしら、とぼんやり考えました。新しい研究室割り当ての日、年功序列で番号を渡され順番に図面から部屋を選んでいくのですが、わくわくして会場に向かったところ、自分の番になって実は187名中187番であることが判明しました。

今はない旧新研究棟を初めて訪れたのはその前の夏のことでした。お茶をいただいた談話室は、年を経て染みついた学校の匂いが充満していて、初めてなのに懐かしい気がしました。

150周年事業を経て、街道側の日吉キャンパスは訪問者を圧倒するほどきらびやかになりましたが、来往舎南側の緩やかな坂道を上がり、藤山記念館から塾生会館、あるいは第二校舎から日吉記念館へ歩いていくと、日々の予鈴だけに区切られないキャンパスの時間が流れているかのようです。

2011年7月のはじめ、教養研究センターの支援を受けた朗読授業の総まとめとして、劇作家の松田正隆氏をお招きして開催した朗読劇ワークショップ「都市日記 慶應日吉キャンパス」は、学生たちの先導で真夏のキャンパスを散策することから始まりました。大学生活の入口であり、通過点であり、交友の拠点でもある日吉を舞台に、学生たちは都市にまつわる自作のテキストをキャンパス内の任意のスポットで朗読します。

本番7月5日、観客は来往舎を出発点に学生ガイドの声とキャンパスマップに導かれて歩いていきます。道々、ひとり、ふたりと佇む朗読者の声に私たちは耳を傾けます。夕暮れの独立館は、ちょうど補講期間中で、吹き抜けの階段を上っていくと、ガラス越しに見えるのは蛍光灯に青く照らされる授業風景、暗くひっそりとした無人の教室、そして緩やかにカーブする線路越しに広がる日吉の街並と遠くに赤く灯る鉄塔。朗読者は「キャンパス都市」のさまざまな「街角」に立ち、自らの身体をさして声を出すことで、キャンパスに流れる時間の一部になると同時に、あたりの空気を振動させ見慣れた風景を揺さ振り、その場にもう少しだけ長く立ち止まるよう人々を招くのです。劇場とは違う開かれた空間で、触れられるほど近くにいる見知らぬ観客を前にひとりひとりが自らの物語を語る——学生たちにとってはとても勇気のいることでした。観客に紛れて彼らの声を「街角」から「街角」へ拾って歩くうち、私は学生たちが身を置くことでこのキャンパスに特別な意味が与えられる瞬間を目撃していると実感しました。そのような日々の時間が層をなしているのが、キャンパス都市日吉なのです。



「都市日記 慶應日吉キャンパス」より

「ベリー公のいとも豪華なる時祷書」(Les Très Riches Heures du duc de Berry, 15世紀フランス写本)の「11月の暦」。中世の森は脅威の存在であったが、資源の宝庫。豚の飼育用に男が棒を投げてどんぐりを収穫している。まさに棒を投げようとする男のしなる身体、豚の見張りをする生真面目な犬、一心にどんぐりを食べる豚の様子がおもしろい。

社会・地域連携セミナー

「三田の家」の中長期的ヴィジョン

「三田の家」は、この夏で6年目を迎えます。そこで、今後の中長期的ヴィジョンについて話し合うため、7月に合宿会議を行いました。各マスター、スタッフが、個人として「三田の家」を続けていきたいか否か、社会的責任として「三田の家」を続けるべきか否か、和気藹々ながらも真剣な議論がなされました。結果、当初からの目的である「21世紀的学生街の創出」を真に実現するためには、1) 活動の裾野をさらに広げるとともに、2) 知的・感覚的により強度の高い企画も行っていくべきという結論になりました。1) に関しては、芝の家との連携をさらに強化し、三田商店街を含めた地域により積極的にアクセスする。また、広く塾員に呼びかけ、「三田の家」を積極的に利用してもらう。2) に関しては、「三田自由大学」（仮称）を設立し、オリジナルかつオープンな企画を打ち出していく、ことになりました。

（熊倉敬聡）

庄内セミナー

第一回社会・地域連携セミナーでは、「庄内セミナー」の概要と成果・課題について報告を行い、多くの方々から貴重なご意見やアドバイスをいただきました。さて、今後の「庄内セミナー」のあり方を考えるにあたっては以下の課題があります。考えうる解決法と共に列挙すると、①参加者の構成と募集方法：社会人・地元からの参加を含め、適切な募集方法を再考する。②開催経費：未来先導基金や外部資金の導入を図る。③趣旨・目的：スタッフ・学生間のみならず、特に地元で教養セミナーとしての趣旨・目的の十分な理解を求める。④スタッフの負担：若手教員スタッフのリクルートと職員の負担軽減を図る。全体としてはプログラムを総合的に再構成し、その実地検証を進めることで、授業化の可能性を探ることが一つの方向性を示唆していると考えています。

（羽田 功）

横浜、寿——「みまもり」、そして「カドベヤ」

2009年度より日吉キャンパスは横浜市中区の寿地区を拠点に教育コンテンツを展開し、拠点「カドベヤ」を設けることで、地域と大学をつなぐ試みを展開しています。寿を社会連携の基盤とする理由はいくつかあります。まず寿地区は日本の経済成長を支えてきた歴史と人々を抱える町であるということ。また、この町は高齢化社会や無縁社会の縮図となっていること。同時にさまざまなNPO団体や社会起業家の活躍が目覚ましいことなどです。この町と歴史を読み解き、住民やここで活動する人々から学び、そういった人々との協働のもとに新しい物事を生み出すために、現在行われている活動には二つがあげられます。一つは法学部設置の授業の中で、NPO団体との連携のもと、独居老人のみまもり活動を行い、リサーチと絡めることで人と町の物語を紡ぎ、あとに残していく作業です。そして地元の社会起業家と協働で横浜の拠点「カドベヤ」を運営し、その中で人をつなぎ合わせるコンテンツをアーティストの協力のもとに展開していくことです。

まだ活動を始めて1年半足らずではありますが、その間に寿地区は横浜市の創造的な活動の拠点、「創造界隈」の一つに入ることになりました。同時に寿という場所に対する根強い思いこみは容易に払しょくされるものではありません。それもまた歴史の一部です。この町の問題を日本の問題として次世代教育へとつなげていくことが今後の課題となることでしょう。

（横山千晶）

ヒヨシエイジ再検証に向けて

ヒヨシエイジは、日吉地域の関係者である、住民や各種団体の関係者、学生、および大学教職員が協働する地域活動全体を指しています。現在は、一部の学生と彼らの趣旨に賛同する大学関係者が協力するという、比較的少数の人々によって支えられています。これは、多くの人に参加してほしいとする当初の理念とは大きく異なっています。

ヒヨシエイジはその活動開始から9年を迎えており、より良い活動を行うために、今までの活動を検証する時期に来ています。このような時に、教養研究センターの事業として新しい社会・連携プログラムを検討する機会を得たことは、大変良いチャンスですので、よく勉強して、今後の活動にフィードバックさせたいと思います。

（長田 進）

身体知とメディアを通した多様なリテラシー教育

新しい「読み書き能力」——複眼思考をめざして

大震災と大津波、そして原発事故を通して、これほど情報の収集能力、読み解く力、さらに行動に結びつける判断力が求められたことは近年ありません。報道のありかたをはじめ、科学技術や再生への取り組みを阻む縦割り思考など、従前の知の枠組みに大きな疑問符が付きましました。21世紀を学生が生き抜いていくためにはパラダイム・シフトに創造的に対応できること、そのために多様なリテラシーが必要です。多様なリテラシーを育てるために、メディア・リテラシーの方法論を活用できるのではないかと考えます。

メディア・リテラシーでは、分析対象とするのは、メディアが「再構築した現実」を読み解くという前提があります。これは文学テキストの読み方に通底します。読むことは、読み手の読書や体験によって形成された知識の基盤・記憶を目の前のテキストと照応させ、意味を創る行為です。読み手の基盤が広ければ広いほど多様な読みを可能にします。「現実」というテキストが再構成されているのであれば、どのような価値観で誰のために何の目的で構成されているのか、その意味を表層テキストから一枚ずつ掘り下げる読みを繰り返していく。文脈、視点によって異なる読みを見せるテキストは、単純な二項対立を崩す力を持ちます。このような手法を用いるテキスト分析は複眼的思考の陶冶に役立つはずです。また、メディア・リテラシーは受容、活用、表現（創作）という3つの能力を問うと言われています。媒体は文字に限りません。身体知という、現代では取り残されがちなテキストへの接近法によって、断片化された知識を統合し、身体・五感を用いてイメージや状況を想像し、意識化する体験を経ることや、映像、音声などの媒体を経て受容し、表現することで、さらに深いリテラシーを養うことにつながるでしょう。情報媒体が多様化する中で、教養研究センターは新しい「読み書き能力」を伸ばすための方法論について議論を深めたいと考えています。

（不破有理）

21世紀のメディア・リテラシー

「メディア・リテラシー」という言葉は、現在その当初の目的を果たしたように思えます。メディア・リテラシー（＝メディアの読み書き能力）は、新聞やテレビなどのマスメディアを批判的に読み解く能力（＝読み）と、相対的に自由な立場からメディアに介入する能力（＝書き）を指す言葉として流通し、機能してきましたが、いまやインターネットが生活の一部となり、誰もが「メディア＝媒介」となることのできる民主的な体制が整ったように思われるからです。しかし、このような新しいメディア環境のなかで、メディア・リテラシーの意義が軽減されることはありません。メディアへの介入が容易になり、誰もが気軽にメディアの書き手となる時代にこそ、メディアそのものへの批判的な考察が必要だからです。

（佐藤元状）

メディア・リテラシー教育と歴史学の研究実践

メディア・リテラシーを涵養する教育とは、私にとってまったく未知の領域でしょうか。私が専門とする歴史学研究の手法を極めて大まかに言えば、その出来事に極力近い立場の人々の手になる「一次史料」を分析し、さらに研究者間の多様な見解を検討することです。ある史実を知りたい場合にそのテキストがどの程度信頼できるかを検討する「史料批判」は歴史学研究の基本ですが、「史料批判」の手続き自体がメディア・リテラシーの具体的実践と言えます。アカデミック・スキルズの授業内で歴史学のディシプリンをそれ自体として教授することは求められていませんし、そのつもりもありません。ただ歴史学の研究実践にメディア・リテラシーの涵養に接続可能な要素が含まれているならば、それらを「アカスキ」の授業に活かすのは意義ある挑戦だと考えています。

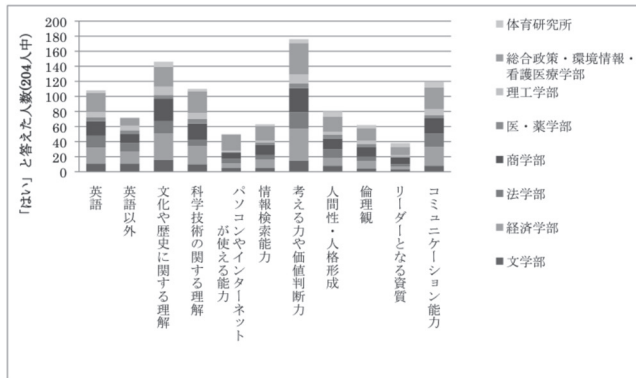
（赤江雄一）



© Clark Lunberry

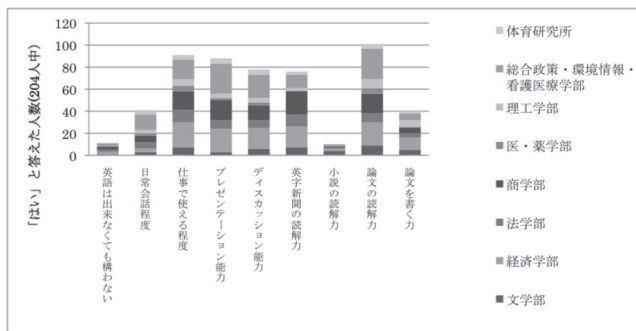
～アンケート集計結果～

問6 大学で身につけて欲しい具体的な教養とはどのようなことですか。
(複数回答可)

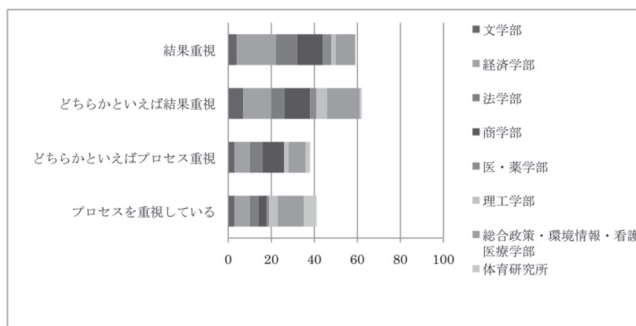


・「考える力や価値判断力」が一番多く全体の86.3%（とくに総合政策他93.3%）。それに続いて「文化や歴史に関する理解」（71.6%）「コミュニケーション能力」（58.3%）。「英語」は専攻の影響が見られて全体の52.9%（文学部64.7%、体育研究所33.3%）（三田59.4%、日吉45.5%）

問7 大学において、卒業までに最低限身につけるべき英語の能力とはどのようなものだと思いますか。（複数回答可）

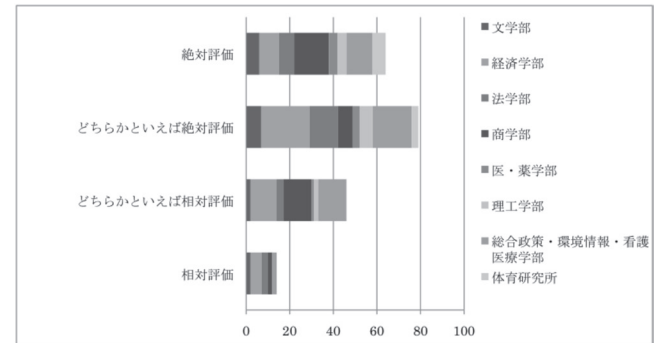


問19 あなたが主に教えている科目の成績評価は、プロセスを重視して成績をつけていますか、それとも試験などの結果重視で成績をつけていますか。（1つだけ）（204人中）



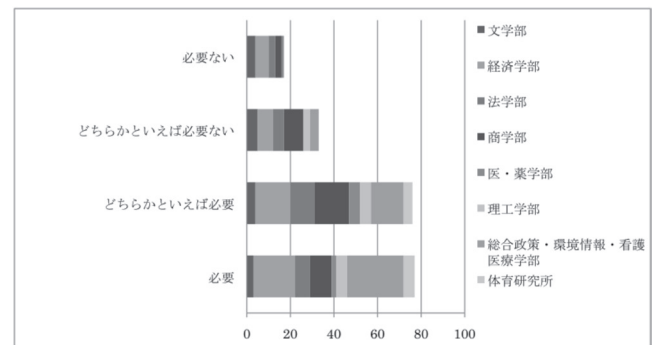
・結果重視がプロセス重視よりやや多い（「結果重視」と「どちらかといえば結果重視」と答えた教員は全体の60.5%）。科目や受講人数に関連すると考えられる。

問21 A・B・Cの人数割合をはじめて決めておく絶対評価と、一定の基準に従って割合を決めない絶対評価のどちらが、より好ましいと思いますか。（1つだけ）（204人中）



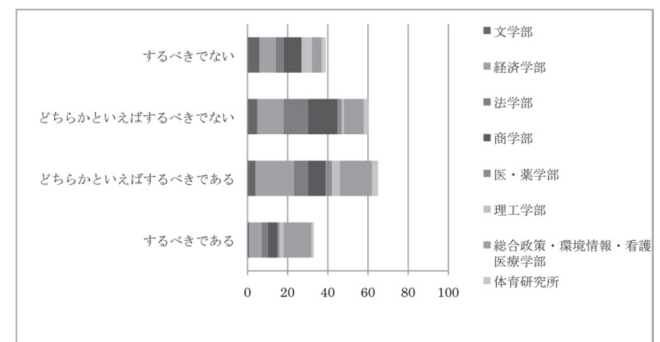
・絶対評価をより好ましく考える教員が多い（全体の70.4%）。

問37 学生アンケートなどの方法による授業評価は必要だと思いますか。（1つだけ）（204人中）



・学生による何らかの授業評価が必要だと考える教員が多い（全体の75.3%）。

問40 学部全体で統一的な授業評価を導入するべきだと思いますか。（1つだけ）（204人中）



・統一的な授業評価導入については意見が半分に分かれた。「（どちらかといえば）するべきである」が全体の49.8%で「（どちらかといえば）するべきでない」が50.2%

（グラフ作成：佐々木美帆）

～アンケート集計結果から～

教員の情熱をカリキュラムへ

教養研究センターの基盤研究は2003年に開始され、日吉の教育の改善のためにさまざまな提言を行ってきました。2010/11年度では、カリキュラムについて専任の先生方がどのように考えているのかについて、アンケート調査を行いました。調査は、教養教育の目的について、シラバス、講義要綱について、成績評価、クラス編成、授業運営、授業評価、カリキュラム編成、半期制、研究と教育といった項目にわたっています。回収率は、全体で30.4%というまずまずの数でした。ご協力くださった先生方に、心から感謝します。

58問のアンケートでは、ほぼ私たち教員の肌感覚というか、コモンセンスが、数値化できたと思います。しかし、なかには興味深い内容も含まれていました。それはとりわけ、これまで比較的デリケートな問題と考えられてきた半期制の問題、授業評価の問題、成績評価の公平性の担保の問題です。2005年に導入された通年半期制に関して、69%の教員がそうなって良かったと評価しています。授業評価に関しては、私自身はこれまで教員の自主性に任せ普段の学生との関わりでフィードバックを受ければ良い、と考えていたのですが、アンケートに答えた多くの教員が授業評価は必要で、むしろ積極的に行うべきと考えていることがわかりました。一方、それを考課に使うのは厳に慎重でなければならない、というのが多くの先生方の考えであることもわかりました。細かい説明は、ぜひとも今学期末までに発行する詳しい報告書をご覧くださいと思います。

今回のアンケートでは、自由記述欄への熱心な書き込みも非常に多く、その行間から慶應義塾の教員の教育に対する情熱を窺い知ることもできました。今回は、自由記述の解析も特殊なソフトを使いながら行っています。このアンケートの結果が、今後各学部や諸研究所での教育カリキュラムのさらなる向上に役立てていただけるよう、現在、詳しい報告書の作成を進めています。（佐藤 望）

2010年度大学カリキュラムに関する教員アンケートの自由記述解析（授業評価を主として）

2010年度に行われた教員を対象としたアンケートの自由記述の解析について報告致します。自由記述を求めたアンケートの質問の中で、実際に教員が最も多く回答していたのが、授業評価に関する質問であり、授業評価に対して、教員が最も関心が高かったと考えられます。

大きく分けると授業評価が必要と考える方と、必要ないと考える方に分けられ、意見の数は、ちょうど半々くらいでした。

必要と考えた方々の意見には、学生からフィードバックが受けられて授業の改善につながる、という意見が多かったです。また、SFCのように既に授業評価を導入しているところでは、必要と言うよりも、当たり前、という意見もありました。必要ないという意見には、ただ、「無理」、「無駄」という意見もありましたが、「学生が教員の授業を評価する」ことに問題がある、という意見もありました。

「授業評価」に何を期待するのかによって意見が変わってくると考えられましたが、「評価」に問題はあるが、「フィードバック」は授業の改善につながる、と考えている教員が多いことが明らかになりました。

（木島伸彦）

日吉カリキュラム検討委員会の中・長期の展望

日吉カリキュラム検討委員会は、日吉7学部の日吉主任・学習指導主任、日吉各部門の主査などで構成されており、大学評議会、学部共通カリキュラム委員会に直属する形で設立されました。この検討委員会の主な役割は、各学部によって設置されている、日吉開講の各科目（授業）について、共通化を認定するところにあります。

この検討委員会が誕生するまで科目が日吉共通化されるためには、まず各学部において自学部設置の科目の決定がなされ、その後学生部内において日吉共通化の確認が行われていました。そしてその上で各学部において他学部設置の科目の併設の承認が依頼されるというプロセスでした。つまり、日吉キャンパス全体が視野に入れられているというよりは、学部中心による授業設置が基本でした。かかる手間が少ないという利点はありますが、設置学部が異なる同一科目の授業の間で相互連絡が潤滑に行えない、各科目の将来的展望を検討する場が欠如しているという難点がありました。そしてこのような状況は、同名科目の過度な重複、設置コマ数の増大、人的リソースの非効率的な配当などに結びついてきたと言えます。

このような状況を改善するため、日吉カリキュラム検討委員会が設立され、現状の改善に努めて新しい道筋を構築しているところです。現在までに、日吉共通科目の理念が設定され、カリキュラム検討部会（グループ）の設立へ向け、芸術、文学、言語学、自然科学の各グループがパイロット・ケースとして活動を開始しています。（石井 明）

研究サポート～「研究会助成制度」

注目！ 研究会助成制度

学会・ワークショップなどの開催支援制度が今年度から試行され3件の応募がありました。講演料の補助や被災地参加者の支援などに活用されました。この助成制度は教養研究センターの所員が企画する研究会やワークショップの開催を支援することによって、日吉における研究の情報交換の場を広げることを目的とします。

助成内容は開催に伴う経費（謝金、印刷費など1件上限10万円）と日吉キャンパス内の広報の支援です。

今後、年2回募集します。1月と7月の5日に締め切り、応募多数の場合は調整のうえ、選考結果をそれぞれの月末にお知らせします。

助成を受けた企画の成果は一般に公開するなどの報告が必要です。詳細は教養研究センター事務室にお尋ねください。（不破有理）

西洋中世学会若手支援セミナー企画 ポスター・セッション+原基晶さん（『チーザレ——破壊の創造者』監修者）による時代考証を巡るトーク

本イベントは2011年8月30日に来往舎シンポジウムスペースで開催されました。ポスター・セッションは人文系学会では馴染みが薄いため、インターネット上に「ポスター作成についてのガイドライン」を公開し、ポスター報告者も参加者も事前に理解を深められるようにしました（その後も公開）。当日の参加者総数は予想を超える90名以上に上り、来場者は全国から集まった若手研究者が作成した22のポスターを見ながら質問やコメントを自由に行い、報告者と来場者の議論で会場は終始活気に溢れていました。参加の敷居は低く形式はカジュアルでありながら深い意見交換を可能にするフォーマットとして、ポスター・セッションは人文系でも有用であると示されたと言えるでしょう。その後の原氏によるトークは、ダンテ研究者の氏が『チーザレ』の時代考証に携わることになった経緯や作品の時代背景の解説に始まり、熱いメッセージで終わる印象的な講演でした。トークのインターネット中継には会場の参加者以上の視聴者が集まりました。最後になりますが、教養研究センターの学会開催支援のおかげで、遠方からのポスター報告者への旅費補助等が可能となりましたことに深い謝意を表します。



ポスターを前に議論する参加者

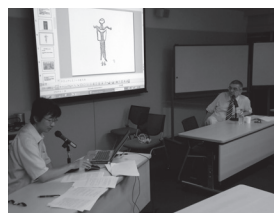


休憩時間に談笑する参加者

（赤江雄一）

フィリップ・ヴァルテール教授講演会 「アイルランド神話のルグとガリア神話のルグスたち——中世の聖人伝に残るケルト神話」

フィリップ・ヴァルテール氏（フランス・グルノーブル第3大学教授・イマジネール研究所所長）による講演は、8月30日、来往舎大会議室において、日本ケルト学会東京研究会主催、教養研究センター共催で開催され、30人強の参加者がありました。日本ケルト学会会員のみならず、他の関連学会からの参加も多数あり、また他大学大学院生や一般の参加も得られました。



講演会は14:30開始、ヴァルテール氏のフランス語に続いて、渡邊浩司氏（中央大学経済学部教授）の通訳という形式で、視覚資料の紹介も交え約二時間行われ、講演後の質疑応答では、語源に関する

比較言語学的な問題提起など、17:30の閉会まで活発な議論が交わされました。

本講演でヴァルテール氏が取り上げたのは、アイルランドやブリテン島など「島のケルト」の神話における主要神であるルグです。ルグはまた、大陸（ガリア）のケルト文化圏でも広く信仰を集めた万能神でした。講演ではこのルグを軸に、考古学的・図像学的証拠、中世ロマンス文学の文献など、多様な資料を駆使して、神話の解釈・理解に中世の聖人伝文献が有用な補足資料であることが示され、大変興味深い示唆に富む講演となりました。

（辺見葉子）

公開講演会「脳科学・心理学・現象学——交錯と離反」

日本基礎心理学会第30回大会が日吉キャンパスで開催されます。その中でセンターと共催で斎藤慶典氏（慶應義塾大学文学部）の特別講演（公開）を企画しています。

心理学は19世紀末に生理学の影響を受け、哲学から独立して今日に至っている学問です。しかし、その中で自然科学としての心理学のあり方を常に問うている学問です。フッサール現象学を専門とする氏に、心理学の哲学的基礎を論じていただきます。この議論は心理学のみならず他の学問分野においても有効なものとなると考えられます。心理学以外の方の出席も歓迎いたします。

日時：2011年12月3日 午後1時15分～2時45分

場所：来往舎シンポジウムスペース

事前申し込み不要、無料

（増田直衛）

研究サポート～「研究の現場から」

三つ子の魂百まで

片山杜秀先生が旧吉に赴任される—このニュースに私は驚喜しました。先生がお書きになられる文章のファンのひとりとして、今後キャンパスで個人的にお話をうかがう機会があるかもしれないと期待していたのです。

そして先日、片山先生がご自身の研究のルーツについて語る場に同席することができました。幼少時に夢中になられた書物へのこだわりと、「喪われるもの」や「敗れるもの」への一貫した関心—音楽、政治、演劇、映画、文学などの領域を縦横無尽に論じられる文章には、実はそうした存在への共感が通奏低音として流れていることに気づき、私は片山先生の文章の謎のひとつが解けたような気がしました。

(大和田俊之)

竜と虎を従えた聖者—中国宗教説話研究から

私は中国の古典小説や伝統芸能などの中に見える宗教説話の研究を専門の一つとしています。今回の報告は、中国の宗教説話における「竜や虎を退治し、また従者としている聖者」という類型についてです。

聖者による竜退治というと、ヨーロッパのものが有名ですが、中国でも、仏教・道教を問わず、非常に多くの宗教者がこうした類型を持っています。そしてその背後にあるのは、かつて中国各地に分布したワニが竜として語られ、虎とともにごく最近まで人々の生活を脅かす存在であったという事実です。私はこの類型研究により、中国のさまざまな宗教説話を捉え直すことができるのではないかと考えています。

(山下一夫)

「研究の現場から」第三弾

教養センター所員の研究の意見・情報交換の場として2011年度から始まった「研究の現場から」も、今回で3回目となります。毎回、発表者に関心のあることや現在、研究していることを肩肘張らずに語ってもらい、その後、参加者全員で軽食も交えながら意見の交換をしています。第三弾は、本年度から専任講師になられた中国語の吉川龍生（経済学部）さんとスペイン語の松田健児（商学部）さんに最新の研究についてお話してもらう予定です。お二方とも新進気鋭の研究家ですので、興味のある方はふるってご参加ください。

日時：2011年12月14日18時15分より

於：来往舎1階101・102

題目：吉川龍生「中国映画のあれこれ」

松田健児「瀧口修造とカタルーニャの芸術家たち」

(大出 敦)

素晴らしきかな、教養！

「グレート・ブックス」を読む。偉大な古典に接する。プラトンやアリストテレスを学ぶ。それがアメリカの大学の教養教育の根幹に生きています。現代文明の知的乱脈さが批判されたニュー・ディール時代以来のことです。コロンビア大学に客員研究員として滞在され、「グレート・ブックス」を小脇に抱える学生の多さに目を丸くして帰国された大和田俊之先生が、驚きを真摯に語って下さいました。古典に反逆するタイプの大和田先生が、努めてニュートラルにお話し下さったのがよかったのです。反逆するもしないも接しなければ始まらない。その土俵を作ってこそその教養教育。古典を嫌って変な本ばかり読んでいては教養教育に携わる資格なし。反省しました。うーん、でも時すでに遅し！

(片山杜秀)

詩と教養

大学で文学、それも詩を研究するということの意味を皆さんと懇談しよう、そのために日本への西詩の導入についてお話してみよう、と考えて準備を進めていたのですが、(皆様ご存知であろう)概観的な話に終始するよりは、むしろ私がどのように詩を読んでいるのか、ということ、その手つきのほどを恥ずかしながらお見せした方が、文学研究が現在抱える問題を共有できるのではないかと、そう思い立ち、マラルメの散文詩2編と平塚らいてうの有名な「元始、女性に太陽であった」という言明との(ありそうでなさそうな)関係についてご報告させていただきました。緊張しましたが出席の方々から貴重なご意見もいただき、楽しいひとときでした。

(原 大地)

求ム・来往最前線情報！

なかなか知り合う機会のない他学部の教員から研究のお話を伺えるのは楽しいものです。「研究の現場から」ではそのような場創りを目指していますが、本ニューズレターでも、皆さんの研究・教育活動の交流の場を紙面で設けたいと思います。お気軽に情報をお寄せください。次号は5月発行の予定です。

*勉強会・研究会・講演会・ワークショップの広報

以下の情報を添えてお知らせください。

①時、②場所、③研究会名、④講師・タイトル等、⑤担当教員・連絡先

*著作・刊行物の広報

2011年度に刊行された方は書誌情報をお知らせください。

教養研究センター (toiawase-lib@adst.keio.ac.jp) まで

(不破有理)

ピア・メンター

今年度春学期の学習相談アワー（5月9日～7月15日、月曜日～金曜日の午後）は、相談件数が合計215件と昨年度に比べ倍近くに増えました。しかも、その半数を単なる問い合わせではない実質的な相談が占め、10名の相談員はうれしい悲鳴を上げました。これは、レポート作成など学習上の躓きを先輩学生がフォローし、学生間の学びあいのリンクを作り上げるこの取り組みが定着してきたことを表すものとして喜ぶべきことです。その一方、学習相談員にあまりに依存しきっているのではないかとと思われる相談も現れ、対応に困るケースも出てきました。後輩の相談に乗りながら、その自発的な学習意欲を引き出していくためにはどのようにすべきか、学習相談アワーのステージアップのための模索は続いています。

この活動の原動力は、学習相談員たちの熱意です。春学期には、ノート企画展示として、「これからの『ノート』の話をしよう：塾生のノート拝見」が開催されました（6月1日～7月2日）。わかりやすい授業ノートとはどのようなものか、授業の記憶をスムーズに呼び覚まし、学習内容を再構築できるノートを取るためのポイントを、塾生の実際のノートを例にして説明する展示で、好評を博しました。1・2年生を対象に、大学の充実した学習をサポートすることを目的に学習相談員による独自の企画が秋学期も行われます。こちらも乞うご期待です。

（種村和史）

選書、今年の収穫

昨年度、シリーズ10冊目が刊行された教養研究センター選書、今年度も刊行予定です。現在、選書の電子化も計画されています。新顔の表紙はマイナーデザインチェンジを予定していますので、お楽しみに！

（吉田恭子）

日吉行事企画委員会（HAPP）秋の実施予定

	企画名	日時・会場
1	身体知とハンディキャップ理解 ～五感を生かしたコミュニケーション～ (学生企画)	10月4日（火）19:00-21:00 テーマ「環境認知」 10月13日（木）19:00-21:00 テーマ「コミュニケーション」 10月20日（木）19:00-21:00 テーマ「チャレンジ精神」 10月25日（火）19:00-21:00 テーマ「障がい者理解」 場所：来往舎シンポジウム スペース
2	Diverta!! 4 (学生企画)	10月19日（水）・20日（木） 18:30-19:30 場所：来往舎イベントテラス
3	日吉电影节 2011 中国インディペンデント映画 上映・講演会	12月7日（水） 上映 16:30（開場 16:20） 講演会 18:15-19:45（予定） 場所：第4校舎B棟J19教室
4	食と農と健康 in 慶應	12月10日（土）10:30-15:00 場所：来往舎イベントテラス および大会議室
5	塾長と日吉の森を歩こう	12月10日（土） 受付開始 9:30～ ※ 事前申込み要

10周年記念事業を公募します

2012年に教養研究センターは10周年を迎えます。センター所員の皆さまには、記念にふさわしい事業のアイデアがありましたら、A4版にまとめた企画書を、12月10日までに、教養研究センター（toiawase-lib@adst.keio.ac.jp）までご提出ください。これを機会に所員になりたい！という方々の受付もしております。

（吉田恭子）

私の名前自慢

6月より教養研究センターに配属されました、傳 小史（でん こふみ）と申します。

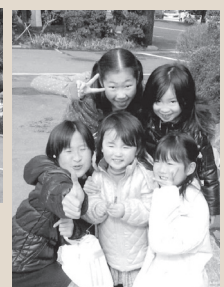
前号の乙子さんにならしまして、私も名前について紹介させていただきます…。名字も珍しいですが（旧姓は伊地知です）私の4人兄弟の名前です。

一番上の姉は『麻乃（あさの）』麻の様に強く…という願いがあったようです。二番目の姉は『亜月（あつき）』アポロ11号が月へ到着するのをお願い…。

兄は『一大（いちだい）』待望の長男!! 一番大きく…そして私、小さくても自分の歴史を創って…との願いだそうです。随分大人になってから朝（麻）と夜（月）、大と小の対になることを聞き、へえ～と感心しました。名付けた父は、かなりのツワモノで個性的ですが、現在はゴルフと家庭菜園と10人の孫をこよなく愛するジジになっております。

という訳で（どういう訳か）難しく珍しい姓と名ですが、どうぞよろしく願いいたします。

（傳 小史）



Newsletter
2011. November No.19

慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for Liberal Arts）

発行日：2011年11月30日 代表：不破有理

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 TEL: 045-566-1151 Email: lib-arts@adst.keio.ac.jp

http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/